

めだかのひとりごと

—— 団塊世代の徒然に ——

Kamui Sei

神居 青

青山ライフ出版

カバー絵／神居 青
装幀／溝上 なおこ

めだかのひとりごと ◆ 目次

まえがき	8
こころの花園	16
りゅうぐうのおとひめの もとゆいのきりはずし	24
雨の日	30
うさぎ君	38
母の白足袋	44
松の川緑道	54

スズメの子	68
星空	76
白と黒と黄	82
劇団四季	90
優先席	96
坊主にしました	104
男の化粧	112
五十過ぎの服選び	120
君達は○○○製造機	128
高齢化社会	134
気遣い	144
人生相談	150

愛の反対語	154
愛なんてない	160
結婚の意味	166
二人の女性	180
粋なひと	184
電車のひとⅠ 「やさしい人？」	188
電車のひとⅡ 「不思議な人」	194
電車のひとⅢ 「紅い髪留め」	198
ラブレター	202
プロポーズ	210
あとがき	232



めだかのひとりごと

— 団塊世代の徒然に —

まえがき

病気で休むこともなく、なんとか真面目に働き続け、サラリーマンとして、定年まで勤めることが出来ました。息子も娘も、それぞれ家庭を持ち、独立しています。私の愛妻は平成七年に、四十六歳でさつさと他界してしまいました。子供達が家を出て、一時同居していた母を自宅に帰すと、一匹の猫が相手をしてくれていましたが、その猫も四年前に十四年の寿命を全うしました。母はその後、一人で生活させるのがどうにも不安な状況になり、介護付き老人ホームに入居させています。私は、自分の家の人に貸し、母の住んでいたマンションに移り住みました。母の入った老人ホームが、そのマンションから近いので、母も淋しいと思わないでしょう。したがって今は、完全に一人暮らしの日々です。

しかし、一人きりの暮らしは、やはり淋しい。幼稚園の時に、二歳上の兄を亡くしてから一人っ子となり、父の仕事の関係で転校ばかりしていたお陰で、物理的に一人であることには慣れてはいます。だから、一人だけで時間を過ごす術は知っています。それに息子や娘が、たまには顔を出してくれるし、遊んでくれる仲間もいますから、付き合いもなくて孤立している、という淋しさではありません。ただ、一人で食事をしている、「これ美味しい！」と思わず呟いて、周りを見ても誰もいない。そんな時に、つくづく淋しいと感じるのです。結婚せずと一人でいたのなら、それほど淋しさは感じないのかも知れません。しかし、愛する妻との、楽しく充実した日々の幸福を味わったことがあると、一人きりの暮らしは淋しいものです。

「人は、一人で生まれて一人で死んでいくのだから、そもそも孤独なのだ」と言った人がいますが、だからこそ生きている間くらいは誰かと一緒にいて、喜びや悲しみを共有したいと思うのでしょうか。一人でいても淋しいと感じない人は、恐らく愛する人

と同じ時間を過ごす、という幸せな経験のない人だと思ふのです。あるいは、余程自分だけの世界に、浸っていられる人なのでしょう。

自分が生まれて育った家族との生活は、楽しく幸せなものですが、いずれは別れなければなりません。一方で、愛する伴侶との生活には、また別の喜びと幸福があります。その喜びと幸せを知らなければ、孤独の淋しさも理解できないと思ふのです。

毎日が日曜日となつて、あらためて、これからは何のために生きていくのかを考えてしまいます。毎日何をするのか？ ということではありません。これから先、この命を何のために使うのかを考えてしまうのです。恋に生きる、世界中を見て回る、事業に打ち込む、芸術に生きる、金を貯める、社会貢献をする、人はそれぞれに目的をもって日々を過ごします。六十を過ぎてから、人の生きる意味というのは、そんな目標・目的の、その向こう側にあるように思えてなりません。

私はごく平凡なサラリーマンで、特別優秀な頭脳の持ち主でもなく、資産家で世の

為に財力を使えるわけでもなく、政治力があつて、人々を導く能力があるわけでもありません。また、人が憧れるような、アーティストでもないし、美貌や肉体の持ち主でも勿論ないのです。世の中に何か貢献しているかという点、現役時代は、自分の仕事は社会に役立っていると信じて一生懸命に働きました。それだけです。今は、僅かながら被災地や慈善団体に寄付をするくらいです。

定年後から、何か新しい事にチャレンジする人も多いのですが、私は、妻を亡くして定年までの十四年間、精神的には、何とか一日一日を消化していくことがやっとだったので、正直言うと、なんだか疲れてしまいました。

しかし、生きていく限りは、これから先は何のために生きるかを、嫌でも考えます。すると、結局私の結論は一つしかないようです。それは、今までの生き方と同じで、愛する者を幸せにする為に生きていくということです。思い返せば、今まで必死で仕事を頑張ってきたのも、家を買って懸命にローンを払ってきたのも、休日に、疲れた

体を叱咤しながら子供達と遊園地に行ったのも、全ては、愛する妻と子供達を喜ばせる為でした。自分の欲望の実現のためではありませんでした。しかし、もう既に妻はいません。子供達も、独立してしまおうと、後は彼等の人生です。一生懸命生きてくれるでしょう。親としては、それを見守るしかないのです。

そうなると、私はまた愛する対象を探していくしかありません。しかし頭ではそう思っていますが、妻への想いを胸に抱いたままでしたから、なかなか行動に移せないでいました。それに、これだけはやはり縁のもので、そうたやすく見つかるものではありません。こちらが、これからの人生を一緒に生きたい人だと思っただけでも、先方がないと感じないのであれば、先には進まないのです。

高齢化社会の今、孤独な日々を過ごす人はもつと増えていくのでしよう。また、家族と同居していても、本当は孤独な人も多いと思います。便利な通信機器を持っている、孤独であれば、日々の会話もメールもありません。文明の利器は、それ自体に

価値があるわけではなく、使う目的そのものがなければ無価値です。「私はネットで、沢山の人と繋がっている」と言う人でも、本当に苦しい時に、一体どれだけの人が、傍に寄り添って、助けてくれるのでしょうか。通信手段の中にあるのはあくまでも情報であって、その中での人間関係は、本当のものではないと思っています。生身の人間として触れ合った時からが、現実の世界です。愛する人というのは、現実の人が対象なのであって、画面の中にしかない存在であれば、妄想や欲望が育つだけなのではないでしょうか。

夜、一人で夜空を見上げながら、水割り片手に物を思い、考え、時に呟いています。好きなキース・ジャレットのCDを消して、静寂の中に瞑想すると、記憶の中の様々な人の声が聞こえてきます。つれない態度のあの可愛い人も、星空の中ではいつも頬笑みかけてくれるのです。時折天国の妻が「老けくんじゃダメよ」と喝を入れに来ます。ジェットストリームのイントロで語っていた、『夜のしじまの、何と饒舌なこと